

B—24 溶剤洗淨による再汚染 (II)

広島大教育 ○藤井 清子
金沢大教育 杉原 黎子

1. 通常行なわれているドライクリーニングには、専門方式においても、コインオペレーション方式においても、かなりの再汚染が認められている。その要因はいろいろ考えられるが、今回は溶剤中に溶出する染料による再汚染を知ることを目的として、次のような実験を行なった。

2. 溶剤には四塩化エチレンを用い、汚染染布は、直接・酸性・塩基・建染・分散およびオイルグリーンの各染料を用いて常法により染色し、その $4E$ は 50 ± 4 とした。供給湿度は $0.1 \sim 2.0\%$ までの7種類で、界面活性剤を添加した場合と、添加しない場合について、比較検討を行なった。

3. 水溶性染料染布：水分の添加によって再汚染は増大するが、界面活性剤の添加によって抑制される。しかし染布の色差はやや増大する。油溶性染料染布：いずれの場合も染色布の色差は大きく、溶剤の透過率低下は著しいが、再汚染への影響は顕著でない。分散染料染布：洗淨による染色布の色差は少なく、水分、界面活性剤の影響も少ない。

再汚染率は毛・アクリル・綿など繊維の種類によってかなり特色があり、溶剤の透過率も染料の種類によって著しく異なる。